

こしえるびと

つむぐストーリー vol.95

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

基盤整備事業を機に就農

夏の強い日差しを受け、出てきた稲穂を優しいまなざしで見つめる遠藤清行さん。間もなく迎える収穫シーズンを前に、圃場を巡りながら水管理に細心の注意を払う。

高校卒業後、岩手大学農業専修科に進み農業を学んだ。その後は市内の会社に勤務したが、一関遊水地の基盤整備事業を機に就農。「水田が1畝の大区画圃場に整備され、作業しやすくなると思った」という期待を胸に、父の清春さんと共に経営規模の拡大を進めた。

スマート農業を積極的に導入

基盤整備事業の完成と同時にスマート農業に挑戦。遊水地で農業を営む一関研農同志会の仲間と国内外の先進地を視察し、2021年に一関遊水地内にGPS基地局

が増設されるとロボットトラクターや直進アシスト機能付き田植え機といったスマート農機を導入した。22年には農家手取り最大化プロジェクトを利用し、リモートセンシングによる可変施肥を実施。効率化を目指している。

休止していた※一関地方農村青年クラブの活動再開にも携わった。クラブ内の研究グループで畜産農家の堆肥を活用した米の栽培研究を行うと、これをきっかけに若手生産者で構成する「いちのせき米クラブ」が発足。生産者自ら販売促進活動を行うなど、米の販路拡大にも力を注ぐ。

仲間が集まると農業の話で盛り上がる。「集まるメンバーで話す内容は変わるが、農業の話をする」と面白い。その面白さを子どもたちや後輩に伝えたい」と清行さん。

いい基盤を若手につなげていくため、仲間と切磋琢磨を続ける。

農業はまちづくり

「農業は一人でもできるが、つながりが大切」をモットーに、J A青年部の仲間が増えることを願う。「米作りは春と秋は忙しいが、それ以外は時間を有効に活用できる」と、農作業の合間を縫って地域の学童農園、出前授業に出向いたり、中里まちづくり協議会の一員としてイベントの企画に携わったり。一関研農同志会では、ごみ拾いやポスター掲示で遊水地内のごみの投棄防止を呼び掛ける。住宅地のそばで農業をすることへの理解を求めながら、つながりを大切に、これからの地域を担っていく。

※一関地方農村青年クラブは現在の両替4Hクラブ（農業青年クラブ）

農業でまちをこくする

一関市山目町 遠藤 清行さん



PROFILE

遠藤 清行さん (47)

Kiyoyuki Endo

一関市山目町

1975年一関市中里生まれ。岩手大学農業専修科修了。市内の会社勤務を経て、2003年就農。06年一関地方農業青年クラブの再結成に携わり会長を務める。岩手県農協青年組織協議会理事、一関研農同志会団長。水稻35畝。両親、妻、子3人の7人暮らし。

